

【研究ノート】

シリアからの伝言

新田 利 恵

私は2004年12月から約2年間、中東のシリア・アラブ共和国に青年海外協力隊員として派遣されました。追手門学院大学在学中は文学部東洋文化学科でイスラム文化を学んでおり、いつかイスラム社会で暮らしてみたいと思っていたので、夢が叶った2年でした。(2000年卒業)



ダマスカスのウマイヤド・モスク（世界遺産）

体験談を書くには2年という歳月はとても長く、初めて経験することばかりで、何を書いていいものか、また書き始めるととても長いものになってしまいます。そこで思い出したのが、シリア人の友達がいつも言っていたことです。「日本に帰ったら、本当のシリアを伝えて欲しい。」私がこの体験記を書くことで、少しでもシリアに対する誤解を解くことができたらと思います。

イスラムと聞けば、その次に続く言葉が「原理主義」「過激派」「テロ」を想像する方が多いと思います。報道されるテロのほとんどがイスラム原理主義過激派による犯行で、それが信仰を守るための聖戦（ジハード）に結び付けられているために、イスラムとは戦争を好む宗教を捉えられがちです。そして、シリアという国はアメリカのブッシュ大統領に「悪の枢軸」と名指しされ、最近では北朝鮮の技術支援で核関連施設を建設していたという疑いをかけられています。こう聞くと、シリアやそこに住んでいるイスラム教徒はとんでもない悪党なのではないかと思われるでしょう。しかし、シリアに住

んでいるのはとても心穏やかで、平和を望む優しい人たちなのです。



シリアのキリスト教会内部

中東といえば聖地を巡ってキリスト教徒とイスラム教徒、ユダヤ教徒がいつも戦争をしているというイメージはないでしょうか。わたしもこの三者は仲が悪いと思っていました。ところがどうでしょう。私の職場にはイスラム教徒もいるし、キリスト教徒もいる。異教徒を感じさせること

とは何もなく、日本と同じ同僚の姿がありました。イスラム教徒が断食月で就業時間は一切飲食ができないにも関わらず、横でキリスト教徒がコーヒーを入れて飲んでいる。それを見たとき私は「少しは気を遣ったら？」と思いました。ところが、それについてイスラム教徒は何も思っていない。私が断食月に気を遣って職場での飲食を控えていると、「あなたはイスラム教徒じゃないんだから食べてよ。」と逆に言われる。気を遣わず、お互いが違うということを認めている、そんな印象を受けました。また、ダマスカス郊外のセドナーヤという小さな町にキリスト教の教会があり、シリア各地から観光客が来るのですが、そこで見た光景は一生忘れられません。ろうそくの灯る小さなお堂に聖母マリアの肖像やキリストの像があるのですが、ここではキリスト教徒は十字をきってお祈りし、イスラム教徒はイスラム式でお祈りをしているのです。そこに連れて行ってくださったシリア人の先生は私に「あなたのやり方でお祈りしていいんだよ。」と言いました。先生は「全ての人が仲良くあればいい。シリアはイスラム教もキリスト教もユダヤ教も関係ない。シーア派もスンニー派も関係ない。他の国では宗教や宗派が異なれば問題が起こるけど、シリアは本当にみんな仲がいい。これが本来の姿なんだ。」と言いました。ダマスカスにはもう少数派になってしまいましたが、ユダヤ教徒も住んでいます。私は中東のユダヤ教徒はイスラエルにしか居場所はないものだと思っていました。ところが、ダマスカスにユダヤ教徒が住んでい



るのです。それについて、シリア人の友達は「シリアにはユダヤ教徒も住んでいる。シリアは彼らを追い出したりしない。シリアはどんな宗教と人だって受け入れるのよ。」と言いました。そして彼女はこうも付け加えました。「ユダヤ人とシオニストは違う。」と。

またこんなこともありました。2006年2月に預言者ムハンマドの風刺画問題が発端となり、ダマスカスで大規模なデモが行われ、一部暴徒と化した人たちが誤ってチリ大使館に放火した事件がありました。日本での報道は暴動の中心部分ばかりが映し出され、まるでイスラム教徒の信仰心が強いあまりに暴徒化しているようでした。翌日、職場で「あれもアッラーが望んだことなの？」と同僚に聞くと一言「あんなのはただのクレイジーよ。」と答えました。放火事件のとき、私もたまたま近くを通りかかったのですが、デモにまったく興味がなくてカフェでお茶をしている人もいれば、野次馬でデモを走って見に行く人たち、デモを見に来たけどそのままショッピングに行く人など、シリア人も様々です。阪神タイガースが優勝したときの大阪とあまり変わらないというのが私の印象です。信仰心が強いのと攻撃的な行動に出るのはまったく違います。私の知っている信仰心の強いイスラム教徒は心穏やかで、人が傷ついたり、誰かがいなくなってしまうことをとても悲しがる人たちなのです。シリアの人たちは世界のメディアが自分達のことをいのように報道していないことをよく知っています。だから、「日本に帰ったら本当のシリアを伝えて欲しい。」と願うのです。

シリアは中東にあっても石油などの天然資源には恵まれていません。しかし、地中海に面していることもあり、農作物は種類も量もたくさん取れます。市場には山積みになったナスやピーマン、トマト、レモン、イタリアンパセリにオレンジ、さくらんぼ、じつに様々な野菜や果物が売られています。私



職場近くの青果市場にて

の職場はそんな市場の一角にあり、仕事が終わるとそこで買い物をして帰りました。市場の人たちには親切にしてもらいました。職場ではフットール（朝食）と言って10時半頃にピザやサンドイッチを食べるのですが、その買い出しで市場を通ると、「それと一緒に食べな。」と言ってレモンやきゅうりが飛んできます。職場にそれを持って戻ると、同僚が「どうしてレモンを1個だけ持っているの？」と私に聞きます。私が、「一緒に食べなって、市場のお兄さんがくれたよ。」と言うと、同僚は、「おまけが付くから、これからもリエが買い物に行つてね。」と笑いました。

でもそんなふうには余裕を持って暮らせるようになったのはシリアに行く前から1年たってからです。はじめのうちは、シリア人の親切さを不審に思つて、シリア人を信じることができないことも多かったのです。

冬、雨が降りそうなときに「乗りなさい、乗りなさい。」と言って車を止めたタクシーの運転手がいました。私はそのタクシーにメーターがついていなかったの、「シャーランまでいくら？」と聞くと運転手は「問題ない。」と答えたので、私は断って歩き始めました。ところが、運転手はかなりしつこく車に乗るように言いました。私は「歩くからいい。」と再度断ると、運転手も「雨が降るから乗りな





い。」と負けません。たしかに雨が降りそうで、傘を持っていなかった私は傘を買うつもりでタクシーに乗りました。乗ると、運転手は「昔、日本企業の運転手をしていました。あなたを通りで見たときに、ヨコヤマさんのことを思い出した。」と話し始めまし

た。私は胡散臭いと思いながらも相槌を打って聞いていました。すると、運転手は「何かあったら私に連絡下さい。携帯電話は持っているか？」と聞いてきました。私はとっさに「持っていない。」と答えて、かばんの中の携帯電話の電源を切りました。運転手は私に自分の携帯の番号を教えて、もう一度「何か困ったことがあったら連絡するんだよ。日本人は私の兄弟だから。」と言いました。タクシーが目的地に着き、私が支払いをしようと「アッデーシュ（いくら？）」と聞くと、運転手は「いらぬ。」と答えました。そして、最後までお金を受け取ってはくれませんでした。彼は通りで日本人の私を見つけたときから、客として乗せようとしたのではなく、私が雨に濡れないように家まで送るつもりで車を止めたのでした。庶民の足であるタクシーを私もよく利用していたので、タクシーにはいろいろな思い出があります。わざと遠回りをして、高い値段を請求されるというありがちなずるいタクシーももちろんいました。間違えて遠回りになってしまって、「ごめんなさい。」と謝ってくれた運転手もありました。タクシーで代金を受け取ってくれず、私が「どうして？これはあなたの仕事でしょう？」と聞いても「いいんだよ。おしゃべりして楽しかったから。」と言って、そのまま行ってしまふ運転手もありました。日本人である私の方が明らかにお金を持っているのに、その私からタクシー代を受け取らず、楽しさだけを受け取った彼から、お金が全てじゃないということを感じさせられました。

私の2年間を支えてくれたのは、そんなシリアの人たちの正直さや優しさでした。アラビア語が上達しなくて落ち込んだときも、職場でうまくいかないときも、その帰りに乗ったタクシーのおじさんが楽しそうに話しかけてく

れたり、アパートの管理人さんが優しい笑顔を見せてくれたり、帰り道のお店の人が手を振ってくれること、もっとアラビア語を勉強して、この人たちともっと話せるようにならなくちゃ、この人たちのために来たんだからがんばらなくちゃと励まされました。

そして、道徳というものは宗教を超えるというのを実感したのがラマダンです。1年目のラマダンはわけもわからないまま、気づけば終わってしまっていたのですが、2年目はウマイヤド・モスクで提供されるイフタル（日没後に食べる食事）に行ってみました。アラブ式の炊き込みご飯とヨーグルト、ホブズという薄いパンとりんご、ペットボトルの水がウマイヤド・モスクの中庭に等間隔で並べられており、そこに順番に座っていき、日没を待ち



イフタルを待つ人々

ます。日没のアザーンとともに人々はがつがつと食事をするのですが、事件はその後起きました。食べ終わった人たちは、食い散らかしたままモスクから去っていくのです。日が暮れて暗くなったモスクには食べ残しと、空になった容器とペットボトルがころころ風で転がっていく寂しい風景が広がりました。「寛大なるラマダんに、イスラム教徒自らがモスクにこんな仕打ちをしていいのか？」というのが、私達日本人参加者の感想でした。私はそのゴミだらけのモスクの写真を撮り、何気なくパソコンに保存しておきました。

たまたま大家さんにパソコンの写真を見せていたら、大家さんが「これは何？」とゴミだらけのモスクの写真を指差しました。私が「この前、ウマイヤド・モスクにイフタルを食べに行ったら、その後のゴミがひどくて、思わず写真を撮ってしまったの。」と言うと、大家さんは「ひゃっ」という声を出して、「これがウマイヤド・モスクなの!？」と言いました。私が「ひどいよね。ありえない。」と言うと、大家さんは「リエ、これは本当のイス

ラム教徒じゃない。こんなことはありえない。この写真を日本に持って帰るの？ 恥ずかしい。」と言い、その後、大家さんは私をいつも自分が行っているモスクへ連れて行ってくれました。ラマダン中に庶民のモスクに入ることはこういう機会じゃないとないと大家さんが連れて行ってくれ



イフタール後のウマイヤド・モスク中庭

たのです。狭いモスクの中にはたくさんの人がいて、私はどこに立っていればいいものかわからず、ただ大家さんの後ろにいました。すると、大家さんの知人が大家さんに何かを言っています。たぶん、「こんなに混んでいるんだから連れ日本人は外にいてももらったら？」と言っているようでした。すると大家さんは、さっきのウマイヤド・モスクのゴミの話を持ち出して、「この子はイスラム教徒じゃないけれど、ここにいる権利がある。」というようなことを言っていました。具体的に何を言っているのかはわかりませんでした。知人もそれに納得したようで、私はモスクの後ろで、イスラム教徒たちが祈りを捧げるのを見ることができました。神聖なものへの敬意やそれに対する態度というのは、宗教を超えるのだと感じました。



私がシリアを離れるとき、迎えの車が来るまで大家さんと二人で自宅にいました。大家さんは「アラビア語を忘れないで、またここに戻って来なさいね。それと、世界は広いからもっともっといろいろなところへ行きなさい。私も若い頃はイタリアやアメリカに行ったのよ。」と言いました。大家さんは敬虔なイスラム教徒で女性。よくイスラム教徒の女性は自

宅からあまり遠くへ出かけないといわれますが、全員がそういう生活をしているわけではありません。私の同僚は仕事であってもダマスカスから離れるのを家族から渋られていましたし、私の大家さんのように30~35年前にイタリアやアメリカに出かけていった女性もいるのです。

独裁政治や悪の枢軸，核開発疑惑，テロの温床などと言われているシリアですが、その中に暮らしている人たちのほとんどはそういうものとはかけ離れた普通の生活をして、私達日本人とさほど変わらない気持ちで人生を送っているのです。

この最後の写真はラタキアという海沿いの町を旅行したときのものです。魚売りの髭のお兄さん、本当に「シリアの人」という優しい笑顔で魚を見せてくれました。ニュースに出てくる髭のアラブ人はいつも何かに怒っていたり、泣き叫んでいたりと、怖い顔で何かを考えていたりしていますが、シリアのこんなでこぼこの路地では、こんなに優しい笑顔に出会えるのです。

